泉穂のいまどき恋愛講座

ある男とある女が出会い、恋に落ちる。その時、お互いが抱く愛情の量がまったく同じということは、決してない。どちらかがどちらかを、より多く愛してしまうのだ。その量の差が、少なければ少ないほど、二人は幸福な状態で恋愛を楽しむことができるだろう。けれども、二人の愛情の差が激しい時、恋はとても残酷なものになってしまう。

今から一年ほど前のこと。私はある場所で、ある男に出会った。最初に彼と視線が合った瞬間に、私は彼に強い憧れを抱き、彼の方も私を気に入っているとその視線から知ることができた。

けれども私は、次の瞬間には、ある種の危機感を抱いていた。『男と女は出会った瞬間に、愛する側と愛される側の役割が決定する』と有名な女流作家が書いていたが、まさに私は、その男との関係において、残酷なほど自分が愛する側の役割についてしまうだろう、と直感的に感じてしまったからだった。

その理由ははっきりしていた。まず、彼は明らかに私よりも若かった。さらに彼は、しなやかな体躯、美しい顔立ち、青春期のきらめきなどを完璧に持ち合わせていた。そして決定的なことは、彼の瞳が、やっぱり若さゆえの残酷な輝きを見せていたことだった。その輝きは、こう語っていたのだ。僕にとって、恋の出会いなど棄てるほどあって、あなたはその一人に過ぎないのだ、と。

一方、私はというと、結婚していて、彼よりもうんと年上で、心のどこかで、自分から日々若さが失われつつあることに怯えている女だった。

私にとっては、彼はたくさんの出会いの中の一つではなかった。なぜなら、年を重ねれば重ねるほど、はっとするような男に出会うことなど少なくなっていたから。

そんな二人が関係を持ったとしたら、どうなるだろう？私はその場で考えてみた。おそらく彼は、私が彼を思うほどは、私を愛さないだろうし、私が執着するほどは、彼は私に固執しないだろう。私は彼に対する愛情や執着を言葉にすることもできず（一つには、私が結婚しているという状況のせいで。そしてもう一つには、私自身のプライドの問題で）、独り苦しむに違いない。そんな二人の未来図が透けて見えていたにも関わらず、私は彼をそのまま、完璧に無視してやり過ごすことができなかった。それほど彼は、私にとって魅力的だった、ということだ。

あれから一年が経って、私と彼との関係は不思議な形で続いている。私は彼にとって、色々なことを相談できるお姉さんになってしまったのだ。私は彼の恋や就職活動の悩みを聞き、アドバイスをし、楽しい会話をする。会うことはほとんど、ない。電話だけの関係。

先日、その彼と会った。電話では週に一度の割合で長話をしていたのに、会うのは実に7カ月ぶりだった。私はもちろん緊張して出かけたけれど、こうも予想していた。多分、私の記憶の中で、彼はとても美化されているだろうから、再会したらあっさり冷めてしまうかもしれないわ、と。

ところが、待ち合わせの喫茶店に、約10分遅れでやって来た彼を見た瞬間、私はすぐさま負けを認めていた。彼は記憶の中以上に魅惑的で、私は言葉を失った。彼はこう言ってのけた。「ごめんなさい、泉穂さん。僕、今日は2時間で帰らなくちゃいけないんです」私は心の中で叫んだ。2時間ですって？7カ月ぶりに会って、次はまたいつ会えるか知れないのに、たった2時間!?ところが私はクールにこう答えていた。「そう、残念ね。でも、私も仕事が溜まっているから、ちょうどいいわ」

そして2時間の逢瀬のあと、私は打ち捨てられたような気持ちで帰宅したのだった。

私は彼を、可愛い坊やとしてではなく、男として魅力を感じているのに、表面的には話の解かるお姉さんを演じている。これはフェアじゃないし、ずるいやり方かも知れない。

皆さんは明らかに“自分が不利”という恋に落ちたことがあるだろうか？その時、選択肢は2つしかない。相手と正面からぶつかって、ぼろぼろに傷ついた挙げ句にその人を失うか、あるいは友達という仮面を被って関係を継続させるか。

おそらくあなたが無鉄砲な青春時代にいるのなら、正面からぶつかることを選ぶかも知れない。けれどもさまざまな経験から、残酷な別れなどもうたくさん、と思う人なら、きっと私と同じ選択をすると思うのだ。あると思うのだ。

プロフィール　1965年生まれ。
同志社女子大学卒、（株）電通プロックス勤務を経て、現在コピーライター。広告のほかＦＭラジオ番組のシナリオや出演もこなす。著書に「ありふれた無邪気が罪になる」（ＰＨＰ研究所）、「キスまで、待てない」（大和書房）など。

MARUOKA IZUHO

HAPPY DREAM MARKS
HAP
ハップハザードドリマークス